

## 序 文

ロジャー・フィンチ先生が、2007年度を最後に定年退職なさる。駿河台大学教授として、また、教養文化研究所所員としての長年にわたる教育研究活動に感謝し、お別れの言葉を申しあげたい。

フィンチ先生は、1990年に本学経済学部が発足と同時に就任され、96年の現代文化学部発足にともない同学部に移り、2007年度現在まで在任されている。途中、短期間体調を崩して休養されたが、さいわい大事に至らず校務に復帰され、今日まで本学の教育につくしてくださった。

じつは私は、1995年に経済学部就任したのだが、翌年には現代文化学部が発足したので、フィンチ先生とはすれ違いとなり、そのうえ英語の会話力もおぼつかないところから、残念ながら直接お話しする機会は多くはなかった。先生についていちばん記憶に残っているのは、教養文化研究所の研究懇話会でアルタイ語についてお話をうかがったことだ。高度な言語学の話がどれだけ理解できたかはともかく、こちらのまったく知らない世界についての深い造詣に、世の中にはすごい方がいらっしゃると思感を受けたことはよく覚えている。そのとき、何冊目かの自作詩集ができあがったということで、嬉しそうに披露なさったことも印象に残っている。

フィンチ先生は、米国のペンシルヴァニア州ピッツバーグの生まれ、ハイスクール時代から美術、音楽、言語、歴史など広い分野に関心を持たれた。14歳ですでに作詩と作曲を始められたというから、かなり早熟の天才である。

高校を卒業後、ピッツバーグの音楽大学に進学するが、学費の関係で卒業を断念、ワシントンD.C.の古美術商に就職して、絵画と古美術の修復の仕事をする。7年間働いて学資を貯えた後、ジョージ・ワシントン大学の音楽科で楽理と作曲を専攻するとともに、大学の事務部門でフルタイムの仕事について学費と生活費をまかなわれた。音楽だけでなく言語への関心もさらに強まり、古英語、古フランス語、フランス文学、イタリア語、ロシア語、言語学、サンスクリット、中国語を学び、優等で卒業された。

その後、歴史言語学の研究に焦点を絞って、欧米では専門家の少ないアルタイ語を選択、ハーバード大学の大学院でトルコ語を専攻される。中国語から翻訳されたウィグル・トルコ語の仏典の研究で博士号を取得、研究の過程で、漢文、モンゴル語、チベット語まで習得されたという。

以上の経歴は、フィンチ先生からメモとしていただいたものだが、その幅の広さ、

ユニークさにあらためて驚き、ほかの先生方にもご披露したくなって少し詳しく紹介させていただいた。

日本に来られたのは1977年、最初はある出版社の仕事だったが、その後、早稲田大学や上智大学大学院で英語や音韻論、比較言語学などを教授、その後本学に就任される。上智の大学院での授業は最近まで続けられ、教え子たちとの交流も続いているということだ。また、TOEICが日本に導入されて以来、LPI(Language Proficiency Interview) プログラムの責任者を務めてこられた。

アルタイ語学者としてのフィンチ先生の業績は、日本にとどまらず、むしろ世界で知られている。国際会議での発表、ハーバード大学やライデン大学での滞在研究、ペルーでの調査など研究実績は枚挙に暇がない。論文も英語圏にとどまらず、ドイツ、ハンガリー、オランダなど各国の学術雑誌に掲載されている。先生のアルタイ語研究の集大成ともいうべき2冊の著書が、まもなくオランダのライデンの出版社から刊行される予定だという。

本学でのフィンチ先生は、英語や演習などの授業、国際交流や企画広報などの委員会、英語入試問題の作成など、いろいろな仕事を誠実にしてくださった。遠くから見かける（私にとっては「見上げると」いったほうが正確だが）先生は、穏やかで優しいが、飄々として、どこか孤高の人というイメージがあった。秩父の自然を愛して、その中で暮らしていらっしゃると聞いたことが、その印象を強めたのかもしれない。大学院も言語学科もない本学では、物足りない思いをなさっているのではと気にしたこともあったけれど、先生は本学を愛して教え続けてくださった。

小さな大学にとっては厳しい状況の中で、ふえる雑務に追われてギスギスしがちな日々、フィンチ先生のようなお人柄は、存在自体が貴重なものだった。そのお姿に接することができなくなるのは寂しいが、大学の雑務を離れて、研究三昧の日々をゆったりと送られることを祈っている。

駿河台大学教養文化研究所長

秋山洋子